

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

アントワーヌ・ガラン アラビアンナイトの発見者

千一夜の話

アラビアンナイトは千一夜もしくは千夜一夜としても知られています。前回でお話したように、この物語集のアラビア語題名は「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」つまりアラビア語で「千と一つの夜」ですから、オリジナルに忠実な訳題はアラビアンナイトではなくて、千一夜ということになります。実際にもこの物語集がはじめてヨーロッパに紹介されたときの題名も「千一夜」でした。最初の翻訳はフランス語でしたから「レ・ミル・エ・ユヌ・ニユイ(千一夜)」。これはアラビア語の原題をそのまま訳した形です。

アラブ世界のアラビアンナイトについては、詳しいことはほとんどわかっていません。前回でお話したとおり、十世紀のバグダードで書店主をしていたイブン・アンナデイームが、シエヘラザードをめぐる設定を書き記してくれましたので、当時から今と同じような趣向で

編まれた物語集があつたことは確認できるのですが、その物語集にどのような話が入つていたかまではわからないのです。ひよつとすると「千一夜」というのは、日本でいう「百物語」のような特定の編集方針をしめす題名だったかも知れませんが、そうなるかどうかのような話を採録するかは、編集者によつて異なつてくるでしょう。

中核部分となるいくつかの古い物語は複数の古写本に記録されていますから、ある程度は決まった形があつたのかもしれませんが、時代ごとに新しい物語が追加されていきましたから、アラビアンナイトの定本と呼べるものは存在しないのです。現存するアラビアンナイト諸写本を比較してみると、時代によつてかなり内容が異なつていきます。一般的なアラビアンナイトには含まれていない話をアラビアンナイトに収録しようとして、途中まで夜ごとの区切りを入れた話があれば、他写本では確認できないような話もたくさんあります。

アラビアンナイトがフランス語に翻訳されたのは一七〇四年ですから、日本では徳川吉宗が將軍になる少し前、赤穂浪士討ち入りの翌年にあたります。当時の日本では町人文化が発展し、大衆向けの小説が出回るようになっていました。山東京伝（一七六一〜一八一六）、十返舎一九（一七六五〜一八三一）、曲亭馬琴（一七六七〜一八四八）といったそうそうたる戯作者が登場する前夜にあたります。フランスでは行商人が民衆向けの簡易本を売り歩いてきたころです。この簡易本は青い表紙をしていたので、俗に青本叢書と呼ばれています。場所は遠くはなれていますが、フランスでも日本でも、一般のひとびとが本を読む時代になつ

ていたのです。

アントワーヌ・ガラン——アラビアンナイトの「発見者」

さて、アラビアンナイトをフランス語に翻訳したのは、アントワーヌ・ガラン（二六四六—一七一五）という東洋学者でした。フランス語版のアラビアンナイトというと、日本ではマルドリユス版（二八九九—一九〇四）がよく知られていますが、フランスではガラン版アラビアンナイトのほうが普通に読まれています。

ガランのアラビアンナイトは全十二巻。その中にはアラジン、アリババ、シンドバッド、空飛ぶじゅうたんなどの有名な物語がすべて含まれています。第一巻が出版されたのは一七〇四年でした。第一巻出版の三百周年にあたる二〇〇四年はユネスコによって「国際アラビアンナイト記念年」に認定され、世界各地で関連の展示会や学会が開かれました。日本の国立民族学博物館でも特別展「アラビアンナイト大博覧会」を開催することになり、資料を集めるために渡仏したさいにガランの故郷を訪問したことがあります。

アントワーヌ・ガランはパリ近くのロロで生まれました。ロロは観光案内にも載っていない小さな村ですが、村の真ん中にはガラン広場があってガランの像も立っています。ガランは幼くして父を亡くしたのですが学問好きの貴族に目をかけられ、パリで古典語を学ぶことができました。フランスの外交使節団に同行してコンスタンティノープル（イスタンブール）

に滞在し、トルコ語、アラビア語、ペルシア語などの東方諸語を身につけました。東方では主に古銭や古写本の収集にあたるかたわら、トルコやアラブをはじめとする中東文化の観察や研究をすすめました。フランスに帰国後は、アラビアンナイトの翻訳以外にもアラビア語の格言集やコーヒー文化に関する著作を著しています。

東西文明史においてアラビアンナイトの翻訳は画期的な意味を持つていますが、十字軍をひきあいに出すまでもなく、ヨーロッパとイスラーム世界はずっと以前から深い関係で結ばれてきました。この時代にはオスマン帝国の内政が比較的安定していたこともあって東方世

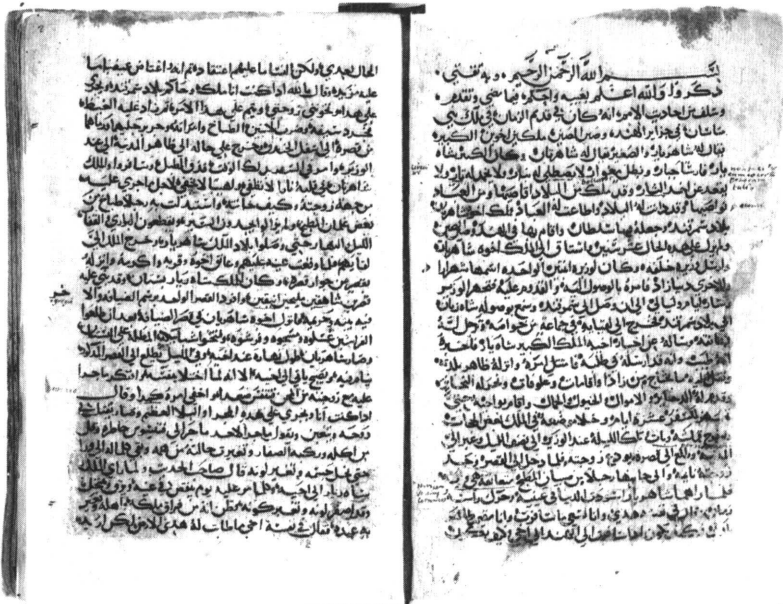


アントワープにあるアントワーン・ガランの像（著者撮影）

界への旅行も盛んになり、数多くの旅行記が著されています。これと並行して東方世界への学術的な関心も芽生え、一六九七年には世界最初のイスラーム百科事典とも呼べる『ビブリオテーク・オリアンタール（東方全書）』が出版されました。最初の編集者はデルベロという東洋学者でしたが、志半ばで他界してしまい、ガランがその後を引き継いで出版したのです。

『ビブリオテーク・オリアンタール』は、東方の文化や風俗習慣を項目別に解説するという体裁になっていますが、アラビアンナイトの項目はありません。この本はオスマン帝国の文人キヤーティプ・チェレビーの著作を主要な種本にしており、チェレビーの著作にはアラビアンナイトのことも記されていますから、ガランはアラビアンナイトのことを知っていたかもしれないませんが、実際に写本を手に入れようとしたのは長年の中東滞在から戻った一六九〇年代にシンドバッドを訳し終えた後のことだったようです。

当時のフランスで本を出版するには、貴族などのパトロンの出版費用を出してもらう方法が一般的でした。費用を出してもらう代わりに、完成した本を献呈するのです。ガランは中東滞在中縁のあった侯爵の娘にシンドバッド航海記を献呈するつもりで、完成原稿を印刷所に渡しました。ところがここで、シンドバッドの物語は長大な物語集の一部であるという情報を得たので、印刷をさしとめてアラビア語の原典写本を探し求めたのです。



現存する最古のアラビアンナイト手稿本（ガラン写本）、15世紀半ば（フランス国立図書館蔵）

アラビアンナイトとの出あい

——シリアから届いた原典写本

ガランのいう「長大な物語集」というのが、アラビアンナイトのことです。シンドバッド航海記は本来のアラビアンナイトとは別個に成立した話ではなかったかとされていますが、ガラン版アラビアンナイトに収録されたため、これ以後のアラビアンナイトにはシンドバッド航海記が含まれることになりました。

アラビアンナイトの原典写本がどのようにしてガランの手に届いたのかはよくわかっていないのですが、ガランの日記から推測すると、一七〇一年にシリア出身の知人をおし

て三巻から成る写本を手に入れたようです。このときガランの手に渡った写本は、偶然ではあります。現在知られている限り最も古い時代のものでした。作成年代は確定していませんが、文中に登場する通貨単位などから、十五世紀半ばに成立したのではないかとされています。この古写本（以後、ガラン写本と呼びます）はある物語の途中で終わっており、題名どおりに千一夜分の物語が含まれていたわけではありません。

ガラン写本には、シャフリヤール王と不実な王妃の話、女性不信のあまり一夜妻を殺してしまうようになった王に嫁ととごうとするシェヘラザードの話、魔人と商人の話、漁師の物語、バグダードの荷担ぎ男と三人の娘の話、三つのリングの物語、せむしの話などが記されています。ここに挙げた物語の大半には共通点があります。シェヘラザードはおもしろい話を続けなければ翌朝には殺されてしまう運命ですし、商人と魔人の話では、魔人が満足するようなおもしろい話を語らなければ命を奪われることになっています。バグダードの荷担ぎ男と三人の娘の話にも、おもしろい話をしなければ殺されてしまうという設定がありますし、新作落語に変身したせむしの話も登場人物がおもしろい話をして処刑を免れるという筋立てになっています。つまり、中世にまとめられたと思われる古層のアラビアンナイトは、手当たり次第にさまざまな夜話を集めたものではなく、文学的センスに恵まれた人の手によって編集されたのではないかと思われるのです。ガランがこのような構成の妙に気づかぬわけはありません。彼はガラン版アラビアンナイト第一巻の冒頭に「ここで紹介する物語は……き

わめてたくみに語られています。色とりどりの話が集められ、それらの話をつなぎあわせていく話術も見事そのものです」と記しています。

また、彼はこう記しています。「これらの物語は）一編の長大な物語集を構成しているように見受けられます。長大な物語集と言ったのには理由があります。原典であるアラブの物語集には『千一夜』という題名がつけられており、全部で三十六の部分から構成されているのですが、ここで翻訳紹介するのはそのうちの第一部にすぎません」

ガラン写本は物語の途中で終わっているため、命がけで夜話を聞かせるシェヘラザードがどうなったかはわからないのですが、ガラン版アラビアンナイトにはハッピーエンドの結末が記されています。トルコに伝わっている十六世紀の写本の結末、ガラン版アラビアンナイトの出版以前にヨーロッパに渡ったエジプト系写本の結末も、ガラン版の結末とほぼ同じですから、ガランは伝聞情報を参考にして結末の部分を書いたのかもしれませんが。つまりガランは手元にある古写本だけではなく、知りえた情報を総動員してガラン版アラビアンナイトを世に出したのでした。

一躍、ベストセラーに

こうして一七〇四年にガラン版アラビアンナイトの第一巻が出版されました。この第一巻はガラン写本に記されている物語と同じ順序になっていますが、当時のフランス宮廷の趣味

にあわせて性的な描写を変えたり省いたりしてしまった部分もあります。たとえば「漁師の物語」に入っている「黒い島々の若い王の物語」の原典には、愛人が暮らす不潔な小屋の寢床にあられもない姿になった王妃がもぐりこむ場面があるのですが、ガランはここを森での逢引のように書き換えています。酒に酔って全裸になった美女が自らのかくしどころを指さしてふざけるというエロチックな描写で有名になった「バグダードの荷担ぎ男と三人の娘」では、問題の箇所をばっさりと省略してしまいましたし、シンドバッドには、読者の興味をひくために変えてしまったと思われる箇所もあります。

ともあれガラン版アラビアンナイトは人気を博し、ベストセラーになりました。この当時のフランスでは、ペロー童話集などのおとぎ話の類が流行していましたから、超自然的存在や魔法使いが活躍するガラン版アラビアンナイトもそのような流れに乗ったと言えるでしょう。一七〇四年から翌年にかけて第一巻から第六巻、一七〇七年には第七巻、一七〇九年には第八巻、一七一二年にはアラジンが収録されている第九巻と第十巻が世に出ました。最後は第十一巻と第十二巻が出版されたのは、ガラン死後の一七一七年でした。

この日付を見るとわかるように第七巻あたりから刊行ペースが落ち、第八巻と第九巻は三年もあいだがあいてしまいました。この刊行ペースは、ガラン版アラビアンナイトが世に出た裏事情を語っています。ガランが翻訳に使ったアラビア語写本は基本的には三冊でした。一七〇一年にシリア出身の友人を介して届けられたいわゆるガラン写本です。ガランはこの

三冊以外にも、少なくとも二冊のアラビア語写本を持っていたと思われませんが、二冊ともにいわゆるガラン写本の続きではなかったようです。

つまり、ガラン写本に記されていたアラビアンナイトはガラン版第七巻ですべて訳されてしまったのです。次に出た第八巻には、ガランが別写本から訳した一作品と別人の翻訳作品がまぎれこんでいます。ただしこれはガランの意図ではなく、はやく続きを出したい書店主がやったことでした。第九巻以後は再びガランが翻訳者となり、いよいよアラジン、アリババ、空飛ぶじゅうたんが登場してきます。

ガラン版第九巻以降に含まれている物語は、いまだにその出所がよくわかっていないのです。とは言うものの、ガランの日記には「パリを訪れていたマロン教徒のシリア人（＝ハンナ・ディヤープ）からランプの話その他を聞いた」という意味のことが記してあります。「（その）マロン教徒がわたしのために書いてくれたランプの話のアラビア語原稿を訳しはじめた」という記事もありますから、ガランの手元にはアラビア語で書かれたランプの話の原稿があったのでしよう。この原稿がどうなったのかはわかりません。

ガラン版の影響

ガラン版アラビアンナイトがフランスでベストセラーになると、すぐにヨーロッパ各国語による翻訳版が現れました。ガラン版の第一巻が出版された翌年の一七〇五年には英語版が

登場しました。ドイツ語訳、イタリア語訳、オランダ語訳、デンマーク語訳、ロシア語訳も次々と出版され、十八世紀が終わるころにはほとんどのヨーロッパ語に訳されていました。こうしてアラビアンナイトは、ヨーロッパ民衆の夢と想像力をはぐくむ作品となっていきました。ゲーテ、アンデルセン、グリム、アレクサンデル・デユマなどがアラビアンナイトの愛読者であったことは、よく知られています。特にイギリスでは民衆向けの廉価本であるいわゆるチャップブックの題材となり、続く時代に大きな影響をあたえることになりました。

ガラン版アラビアンナイトは、ヨーロッパ各国語に翻訳されただけではありません。これの出版がきっかけとなり、フランスやイギリスではオリエン트에題材を求めたいわゆる東方小説が流行するようになりました。啓蒙の世紀を代表するデイドロ、モンテスキュー、ボルテールはいずれも東方小説を書いています。ただし東方小説とは言っても、異国情緒あふれる一大ファンタジーを創作したわけではなく、彼らの主な目的は、東方を舞台にしてフランスの社会事情を風刺することにあります。言ってみれば、東方世界を「自らを映す鏡」として利用したわけです。東方世界に対するこのような視点は、後のオリエンタリズムにも引き継がれていくこととなりますが、これについては回をあらためて見ていきましょう。

ガラン版アラビアンナイト刊行中から英語訳が登場したイギリスでも、東方を舞台にした小説が発表されました。イギリスでの東方小説はやがてゴシック小説が成立するきっかけとなりました。ゴシック小説の傑作として知られるベックフォードの『ヴァテク』が東方小説

の延長線上にあることはかねてから指摘されています。

市民階級が力をつけていたイギリスでは、それまでは千一夜として知られていたガランの物語集にアラビアンナイトという題名をつけました。先ほどもお話ししたとおり、ガラン版アラビアンナイトが英語訳されたのは第一巻が出版された翌年でした。そしてその翌年にはガラン版アラビアンナイトの第一巻から第四巻までを二分冊にした「アラビアンナイト・エンターテインメント」が出版されています。「アラビアンナイト・エンターテインメント」は十八世紀を通じて何度も版を重ね、正確な出版回数ばかりません。

これ以後、中世のアラブ世界でまとめられたと思われる「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」は、アラビアンナイトという題名で広まっていききました。ですがガラン写本に書かれていた「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」とアラビアンナイトには決定的な違いがあります。そう、アラジンもアリババも空とぶじゅうたんも「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」には載っていないのです。こうしてアラブ世界で誕生した物語集はガランの手をへて、新しい姿へと変身をとげました。そしてこの新しいアラビアンナイトは、ヨーロッパと中東という異なった文明をつなぎながら、世界中にファンタジーの種を撒くことになったのでした。

さて、アラビアンナイトがどうして今のような形になったのかについて、ざっと確認してみます。次回ではシンドバッド航海記に焦点を絞り、この物語から何が見えてくるかをさぐってみましょう。